

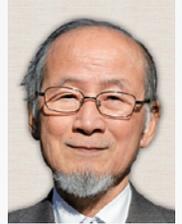
巻頭言
Greeting

×

津村 俊夫
Toshio Tsumura
聖書学研究所 所長

Profile

1944年生まれ。1974-2022年聖書神学舎教師。15年間筑波大学教官。新日本聖書刊行会理事。聖書考古学資料館理事長。国際旧約学会(VT)顧問。



主を正しく恐れる - 釈義から神学へ -

聖書原語を学んで原典の釈義をしたら、聖書が正しく理解でき神の「みこころ」が深く分かるような気がします。確かに原典でこそ聖書の味わいが深まることもあるかも知れません。しかし、原典によく通じるのは並大抵のことではありませんし、人によっては得手不得手ということがあります。言語(ことば)は学べば学ぶほど深みが増します。しかし主(みことば)を知る知識は、主を正しく恐れ主と親しく交わる(詩 25:14)ことがなければ、主の「みこころ」を悟ることはできません。これは説教者として召された「みことば」に仕えるしもべ達は特に心すべきことです。

釈義(「読み出し」)によって、今までの教理が改善されることもあるでしょう。今までの原語理解が正確でなかったことが明らかになり、聖書翻訳が時代と共に改善されることも事実です。何世紀にも亘って「解釈の十字架」と言われた難解な箇所が、考古学的遺物や写本の発見、言語学の進歩によって「やっと分かった」と言うこともあります。しかし、長らくキリスト教会で受け容れられてきた基本的教理が、釈義の結果否定されるということは、余程の事がない限りありません。

「余程の事」があるかのように、19世紀末のグンケルたちによって、長く教会史で受け容れられてきた「無からの創造」の教理が否定されています。それは、「無」という語を「混沌」とか「未秩序」・「非秩序」に置き換え、そこに神話の図式を「読み込む」ことによって行われています。グンケルの主張を受け継ぐバルトの「混沌説」はその代表的なもので、ウォルトンの機能的創造論も同じ流れにあります。

近年、釈義のゆえに「キリストには原罪がある」というような主張が、身近なところでなされていることに私は愕然としています。著者は長年の「釈義」的研究の結果、その著書において「主イエスの無罪性」に言及しながらも、ローマ人への手紙8章3節は「主イエスの肉は私たちと同じ、墮落後の罪の肉を取った」(少し前の文脈では「墮落後の原罪を持った肉」と表現)と主張しているのです。

聖書信仰を告白する者たちの間で、解釈において意見が異なることはよくあることです(例えば、幼児洗礼や千年王国の理解)。従って、超教派の教育機関で、解釈の「幅」があることを互いに認め、尊重することは大切です。—「シカゴ声明」の後に、「解釈に関する声明」が出されたことはこのことを示しています。—しかし、キリスト教の基本教理を「否定する」かのような釈義であるならば、「余程の事」がない限り、受け容れられるものではありません。

聖書解釈の王道は「釈義から神学へ」であって、既存の「神学」を聖書テキストに「読み込む」ことではありません。しかし異なる意見に謙虚に耳を傾け、やがて真の解決が明らかにされるときを待つことをしないなら、釈義が結果的に「読み込み」になってしまう危険性があります。「みことば」の権威にどこまでも服し、自らの理解が「書かれていることを越えない」(1コリ 4:6)ようにしたいと願います。

No.203 Topics

- p03 研修生の証し
- p04-05 卒業生の現場から
- p06 学びの窓
- p07 教会音楽専攻委員会から

赤坂 泉

Izumi Akasaka
聖書神学舎 校長

主によって 人の歩みは確かにされる。
主はその人の道を喜ばれる。
その人は転んでも 倒れ伏すことはない。
主が その人の腕を支えておられるからだ。
(詩篇 37:23,24)

変化の中にも

この数ヶ月間に、学舎は様々な不測の事態を経験しています。備えて回避できたかも知れない状況もあれば、予想も準備もできなかったような局面もありました。けれども、主の支えを得て、歩みは前進しています。

既報のように田村将師が新年度に専任教師として着任します。祈りに答えてくださる主に感謝し、御名をあがめています。

鞭木由行師の著作『パウロの福音を生きる』の「主イエスの肉は私たちと同じ、墮落後の罪の肉」という解釈を巡って困惑が広がっているという声を受けて、教師会で検討を重ねました。「神性との結合のゆえに罪を犯すことができなかった」という説明を受けましたが、「キリストに原罪がある」という見解とその贖罪論への影響を教師会は受け入れられないことを確認しました。鞭木師は学舎の奉仕を離れることになりました。

今年度をもって宮井羊一兄が定年退職することも大きな変化です。28年に及ぶ主への献身に感謝し、主のねぎらいを祈ります。

研修生関連では、一人の病気退学を受け止めて祈り、一人の出産を喜び祝い、卒業と入学の季節に備えています。

禱援を感謝します

皆様の日頃の禱援に感謝しております。
年度末を見据えている研修生の学びと訓練が

主の喜ばれるものであるように、中でも卒業予定者4名のために主の恵みのお取り扱いをお祈りください。また、新入生が導かれるように、主の励ましと導きをお祈りください。

教職員一同のための禱援を感謝します。田村将師と家族の異動のために、牧会に従事している先生がたの日々の働きのために、職員それぞれの賜物と務めが主に用いられるように、どうぞ引き続きお祈りください。

財務の面でも主の助けを必要としています。主が諸教会、諸兄弟を祝福して下さって、神学校の働きのために献げる手を増やし強めてくださいますように。

締めくくりと新年度への備え

年度末には教師会の7名で、新年度また新体制に備える協議と祈りの合宿を持ちます。学舎が主と主の教会の前で、託された責務をよく果たせるように、山積する課題を整理し、優先順位を整えて、前進したいと思います。事務の態勢整備、教師陣の充実と次世代への継承など。支えてくださる主の御手を信じて。

来年度は「教会音楽講座」を休止して、次の企画に移行する準備をします。「聖書神学舎デイ」は6月27日に千葉県市川市のOMFザ・チャペル・オブ・アドレージョンを会場に開催予定です。この5回目をもって区切りとし、以降は小さなチームで主日の教会をお訪ねして奉仕させていただく可能性を検討しています。改めてご案内します際には、是非ご活用ください。

新年度に備えるこの時期に、諸教会にも主の恵み豊かな顧みがありますようお祈りします。

ただ主の愛によって

平田 美名

Mina Hirata

聖書神学舎 本科2年

寮での共同生活を通して、「神様が愛してくださったように互いに愛し合う」ことの難しさを日々、実感しています。人は一人ひとり愛の感じ方が違い、今まで生活してきた文化、生活習慣、考え方も異なります。また、伝え方や受け取り方、感情の表し方についても、自分自身の新しい一面に気づかされることばかりです。そのような多様性もまた、主が与えてくださっているものだと感じます。交わりの中で互いに磨き合い、自分自身と向き合うことを通して、主をより深く知る恵みを覚えています。特に、私が暮らしている寮は、二人部屋であり、ほとんど毎日ルームメイトと祈る時間をもっています。共に祈る交わりの中で、祈りの視野が広がり、共有していた祈禱課題に変化があったときには共に喜び、悲しむことができることは、寮生活の恵みです。

「生活のすべてが学びと訓練の場」と、この二年間繰り返し聞いてきました。だからといって、勉強が疎かにされるわけではなく、むしろ課題に追われながら、一日一日をギリギリ乗り越える日々です。係活動や交わり、教会奉仕など、すべてをこなそうと先々の計画を立てますが、何一つ計画通りにはいきません。語学の学びに不安を覚えたり、理解力の不足に無力さを痛感したり、寝不足で心の余裕を失い、後悔の思いを抱くこともあります。しかし、その都度、神様がイエス・キリストを通して私を救いへと導いてくださったのは、ただ一方的な愛のゆえであること、そしてその愛に応えたいという思いで歩む道は、厳しさの中にも確かな喜びがある

ことに、立ち返らせていただいています。

主がみことばと祈りを通して励まし、必要な力を与えてくださっているからこそ、ここまで歩んでくることができました。

ガラテヤ人への手紙 2章 20節

もはや私が生きているのではなく、キリストが私のうちに生きておられるのです。今私が肉において生きているいのちは、私を愛し、私のためにご自分を与えてくださった、神の御子に対する信仰によるのです。

マタイの福音書 6章 33,34節

まず神の国と神の義を求めなさい。そうすれば、これらのものはすべて、それに加えて与えられます。ですから、明日のことまで心配しなくてよいのです。明日のことは明日が心配します。苦勞はその日その日に十分あります。

「神様が今日、私に備えてくださっていることをなす力を与えてください」と祈りつつ、日々励んでいきたいと思えます。

(写真：ルームメイトと。左が本人。)



能登の支援活動に取り組んで

岡田 仰

Kou Okada

金沢独立キリスト教会 牧師
能登ヘルプ代表
(1988年度卒業 30期)

能登ヘルプのために、様々なご支援をいただいております事を心から感謝しております。あの発災の日、異常な町中の揺れに、これは尋常でない事が起こったと感じた事を昨日のように覚えています。発災と共に、被災地の教会として、やはり、被災地の「良きサマリヤ人になるべし」という主の導きを受け、私達は、石川県世の光放送委員会が軸となって、能登ヘルプを立ち上げ、「キリストに仕える者として、キリストの心一愛、継続性、秩序、協力、祈りーをもって、被災地と被災教会に仕える」という理念に心を合わせて下さる全ての方々と共に、支援活動を始めました。その時、同窓の全キ災の北野献慈先生、又、釜石支援を担われた高橋和義先生、能登の荒川康司先生、永井仁志先生が、励ましと知恵をもって支え協力して下さった事を感謝しております。

手探りで始まった支援活動でしたが、「ただ主が喜ばれるように」という一点に目を向けつつ、この2年間、ワーク支援や仮設支援に、取り組んでまいりました。多くの方々の祈りの中で、様々な主の不思議を経験致しました。約2億円の支援金、また、7千名に及ぶ各地からのボランティアには、教会の愛の力を感じ励まされました。又、「あなたがたのお陰」「はじめ私達は立ち上がれなかった。でも、あなたがたが来てくださって、段々希望が出てきた」などの被災者の言葉には、働き

の手応えを感じました。そして、受洗者、求道者が与えられた事、心の支援としてトラクト「こころのごはん」、音のトラクトとしてCD「のぞみ」を作成出来た事、キッチンカーを取得した事、更に、奥能登のベースとして穴水にクリスチャンセンターを開設出来た事、月2回の礼拝が始まった事も、神の恵みによる前進と覚えて感謝しています。これらはみな主から与えられたものですから、今後、全国の教会の皆様には、教派を問わず、様々な形で自由に用いて頂きたいと願っております。

被災地の現在ですが、道路の復旧、家屋の解体は確かに進んでいますが、震災関連死の数が700名に及んでいる事、又、人口流出が止まない事、なかなか生業が回復していかない事は、深刻な課題だと言われています。

この中で、私達は、主の働きとしての使命感に立って、継続して、主の導きを求めつつ、あせらず、あきらめず、コツコツと、被災地、被災教会に寄り添い続けていく所存です。是非、今後とも、常駐の働き人、ボランティアの派遣を含め、お祈り、ご支援のほど宜しくお願い申し上げます。



同窓生と災害支援



北野 献慈

Kenji Kitano

広島福音自由教会 代表牧師
キリスト全国災害ネット 代表
(1995年度卒業 37期)

① 広島福音自由教会に遣わされて

私は1996年に聖書神学舎を卒業後、2年間海外で学び、99年に出身教会である広島福音自由教会(拝高真紀夫元代表牧師)の牧師となった。翌年、広島市安佐北区に2つ目のチャペルとして可部グリーンヒルチャペルの開拓に遣わされ今日に至る。2011年には同窓の山田良輝牧師が3人目の牧師として加わり、翌年安佐南チャペルの開拓に遣わされる。さらに4月から同窓の鈴木俊見 KGK 主事を4人目の牧師として招聘する予定である。私たちの教会は聖書神学舎での学びの恩恵を大いに受けており、感謝に堪えない。

② 災害支援の働きに遣わされて

私が災害支援に深くコミットするのには、三つの転機があった。第一は聖書神学舎2年目の1995年、阪神淡路大震災である。震災後3週間が経ちボランティアが減中、「手が足りないので神学生を派遣してほしい」と被災地教会から要請が届いた。研修生の願いに応じて舟喜信会長が派遣を決断し、元東京レスキュー隊隊長経験者の菅野淳一研修生を中心にチームと備品が整えられ、翌週1週間派遣された。教会音楽舎研修生たち

とアカペラで讃美した時、多くの被災者が足を止め涙を流して聴いておられた光景は忘れられない。被災地こそ教会が仕えるべき場所の一つだと示された経験となった。

第二は2011年の東日本大震災である。震災後2週間で、物資をトラックに満載し、21時間かけて仙台と石巻に届けた。それがきっかけで石巻クリスチャンセンター設立と運営に関わり、長期的支援の大切さを学んでいる。

第三はその後、広島市と近郊で起こった二度の土砂災害である。最初の広島土砂災害(2014年)では自分たちの町が被災した。翌日、地域教会ネットワークである広島宣教協力会のリーダーが集まり広島災害対策室を立ち上げ、地域に仕える機会となった。4年後の西日本豪雨災害では呉市を中心に、市・社協・町内会と連携して被災地に仕える経験が与えられた。この災害を機に、西日本災害支援連絡会が始まり、広域の交わりの恵みを経験した。その呼びかけによりキリスト全国災害ネットが発足する(48団体)。

各地の支援現場や会合で聖書神学舎の卒業生と出会うことが多い。能登半島地震でも能登ヘルプ代表の岡田仰牧師、輪島聖書教会の荒川康司牧師、羽咋聖書教会の永井仁志牧師が神学舎の先輩であることは、信頼関係の醸成に一役買ったと信じている。これからも全国で同窓生の皆様と共に宣教協力や災害支援で主に仕えられる機会がますます与えられることを期待したい。



- 1 解体前の家の整理
- 2 キッチンカーによるハンバーガー提供
- 3 穴水クリスチャンセンター

時代と世代の分断をいかにして超えるか

若井 和生
Kazuo Wakai
聖書神学舎 教師

聖書の理解が恣意的解釈にとらわれないうために、聖書に記される事実をまずしっかりとおさえることが求められます。同じ原則が歴史研究にも当てはまるのではないかと感じています。歴史的事実の蓄積の中からメッセージが聞こえてくるからです。

私は、中田^{よしあき}善秋という人物について理解を深めるよう今まで導かれてきました。当時神学生だった中田は、日本基督教団から推されて陸軍の宗教宣撫班員の一人となり、太平洋戦争勃発直後のフィリピンに派遣されます。フィリピン各地の教会を巡っては、日本軍への協力を呼びかける宣撫工作に従事しました。

1945年2月24日、500名以上もの住民が日本軍によって虐殺されるサンパブロ事件が発生。そこで中田は10名程の住民たちを救出するのですが、事件への関与を疑われ戦争裁判にかけられます。下された判決は「重労働30年の刑」でした。その後スガモプリズンに移され、戦後の10年近くを「戦犯」としてプリズンの中で過ごしました。

怨恨と復讐心に支配されるフィリピン裁判の不当さに、中田は当初激しい怒りを覚えました。その一方で、アジアの住民たちが自分に向ける激しい憎悪も意識しつつ、「自分に責任がなかったと本当に言えるのだろうか」と考え始めます。その後、戦争に関与した自らの責任についてプリズンの中で苦悶し続けました。

中田を軍に紹介したのは教会でした。しかし戦犯となった中田に対して教会からの関与も配慮もありませんでした。戦後、ある種の未来

志向で動き始めた教会が、国策に迎合し戦争協力に邁進した自らの過去に向き合うことは、殆どありませんでした。

中田のような戦犯に意識を向けることは、戦時中に犯した自らの罪を思い起こすことにつながります。戦後の教会は中田を封印することによって、自らの戦争責任を曖昧にしたと言えるでしょう。

教会史を学んでいると、教会を通してなされる神のみわざが世代や時代を超えて継承されていく姿を確認することができ、励まされます。ところが日本キリスト教史を学んでいると、主の働きが世代や時代によって分断されていることが多いことに気づかされます。

その最たるものは戦前と戦後の間に、断絶とも呼べる程の大きな分断が横たわっていることです。戦後世代の信仰者たちは戦争に邁進した戦前世代の信仰のあり方を、そのまま引き継ぐことができませんでした。教会は戦前の教会のあり方を否定し、無視し、封印することによって、戦後の教会形成に励んできたように見受けられます。

福音を通して私たちが教えられること、それは過去にどんなに大きな罪が犯されたとしても、主のあわれみにすがりつつ前の世代の弱さも痛みも担いながら、彼らの信仰を引き継ぐことができる、ということではないでしょうか。歴史が私たちに問いかけているのは私たちの福音理解であり、福音理解に基づいた私たちの生き方そのものであると思わされます。

2つのみことばの音楽

長谷川 綾子

Ayako Hasegawa

玉川聖学院 教員(音楽科)

日本イエス・キリスト教団 荻窪栄光教会 音楽部主任

私はこれまで主にキリスト教主義学校、教会奉仕を中心に拙いながらも励んで参りました。いつまで続けられるだろう?と年々体力的な限界を覚えるのですが、同時に何と幸福な働きに就かせて頂いていることか、感謝の思いも深まるばかりです。それは土曜日以外毎朝、礼拝式に身を置かせて頂ける事、その恵みの座に皆で集うために委ねられている教育的役割等についてなのですが、中でも「みことばの音楽」への取組はやはり特別なものであると実感致します。

教会ではヘンデル作曲オラトリオ『メサイア』を創立者の遺した日本語訳でチャリティー公演として長年取組んでいます。原作とは主動詞の位置が変わってしまう等の変更事項があるにも関わらず、配慮の尽くされた訳詞と、何よりも作品そのものが持つ力が説得力を発揮し、伝道公演として用いて頂けるのです。

また、勤務校では「賛美の心を養うために」と高校2年生まで週2時間音楽を必修科目として扱いますが、その最後に学ぶ「みことばの歌の作曲」は尊いものです。1年半程かけて楽典を学び

終え、4小節、8小節、最終的に16小節を作ります。自分が出会った聖句を何とかメロディーにしようと奮闘する高校生の姿にいつも胸が熱くなります。添削指導をする中で、彼らが聖書の神様に出会っている事、ここから作りたい、と握りしめたみことばへの感動や思いが伝わって来るからです。約3ヶ月間に及ぶ160人分の添削は大変ですが、生み出される作品が本当に素敵で、毎年この中から誕生する名作を毎朝の礼拝で聖歌隊が歌わせて頂きます。

こうしてみことばが宝物となっていく感謝の営みを、十分な質にはとても達していないのですがHP等でお分ち申し上げたいと願うこの頃です。



2025年度を振り返って

石川 由紀子

Yukiko Ishikawa

聖書神学舎 講師

2025年度の音楽専攻は、1年、2年に各1人ずつで学びが進められました。作曲を担当している講師として思う所を記します。作曲の授業はテキストである「みことば」の前に一人立たされるような時間です。どのように理解し、音にし、語り、歌うのか。経験した人でないとその重みは理解できないかもしれません。

賛美礼拝で歌った詩篇32篇の中に、聖歌隊全員による朗読部分がありました。楽譜を見た時に戸惑いがあったことと想像できます。それでも皆何かしらの決意をもって語りました。音楽専攻の学生によるソロの朗読は、他の学生たちにも少なからず影響を与えたことでしょう。声楽やオルガン、作曲もみな、聖書のみことばに仕えるためのものです。いろんなピースが適切にはめられて全体像がわかるのは、卒業後、奉仕の場に出て責任を持った時かもしれません。

研修生も、教える者たちも、主がみこころのままに育ててくださるようにとの、皆様の祈りが欠かせません。

○ 2026 年度 講座案内 2026 Courses and Schedule

2026年度は次のようなプログラム、講座を予定しています。詳細はウェブサイトやそれぞれの案内をご覧ください。このほかに聴講制度があります(詳細は事務局まで)。

○ 拡大教育・継続教育

詳細は開催時期が近づいた頃にウェブサイトでご案内します。

拡大教育

聖書神学舎デイ 聖書神学舎を知っていただき、聖書に親しみ読む喜びを共有する機会です。
6月27日に千葉県市川市のOMFザ・チャペル・オブ・アドレージョンで開催します。

教会合唱講座 みことばを土台とした教会音楽を学ぶための講座です。
新企画準備のため、2026年度は休止します。

継続教育

旧約・新約釈義 2-3月の平日夜120分を4回、オンラインで。原則として聖書神学舎卒業・修了生対象。

○ 第50回 夏期研修講座

「福音宣教の接点」
- 古代カナンから現代日本へ -

期間 : 6月29日(月)～7月 1日(水)

会場 : 奥多摩福音の家

対象 : 牧会者、牧会者の配偶者

講師 : 津村俊夫師ほか

詳しくはウェブサイトをご覧ください。

○ 第41回 教会音楽夏期講習会

「贖い主キリスト」

期間: 7月22日(水)～ 24日(金)

会場: 聖書神学舎

対象: 聖歌隊員、聖歌隊指導者、奏楽者、独唱者等、礼拝や教会の諸集会で音楽の奉仕に携わっている方、および奉仕の準備をしたい方。教職者・信徒の方も参加できます。

講師: 聖書神学舎教師・講師ほか

詳しくはウェブサイトをご覧ください。

○ 2026 年度 主要年間予定 2026 School Year

2026

4月 7日(火)	入学式	10月29日(木)～10月30日(金)	リトリート
4月10日(金)	前期授業開始	10月31日(土)	後期授業開始
5月 7日(木)	祈りの日	11月 7日(土)	オープンデイ
5月28日(木)～5月29日(金)	特別講義	11月25日(水)	祈りの日
6月20日(土)～6月26日(金)	集中講義	11月28日(土)	賛美礼拝
6月27日(土)	聖書神学舎デイ	12月18日(金)～1月 4日(月)	クリスマス調整期間
6月27日(土)～8月30日(日)	夏期調整期間	2027	
6月29日(月)～7月 1日(水)	夏期研修講座	1月 5日(火)	後期授業再開
7月中旬～	キャラバン伝道	2月 8日(月)	入学試験
7月22日(水)～7月24日(金)	教会音楽夏期講習会	2月11日(木)	信教の自由を守る日
9月 2日(水)	前期授業再開	3月10日(水)	後期授業終了
10月21日(水)	前期授業終了	3月11日(木)	卒論発表会
10月22日(木)～10月30日(金)	秋期調整期間	3月15日(月)	第68回卒業式